

朗
詠
歌
歌
集

八雲神歌

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに

八重垣つくるその八重垣を

朗詠歌集目次

八雲神歌

2

大本歌祭神歌

3

開祖さまのお歌

4

聖師さまのお歌

5

二代さまのお歌

11

三代さまのお歌

13

尊師さまのお歌

23

四代さまのお歌

31

教主さまのお歌

37

大本歌祭神歌

昔より中絶したる歌まつり起して御代を照てらさむと思ふ

敷島の大和みうたを詠みよみて神素盞鳴の神思ぶかな

国々の八重の垣根を打ち払ひ神代を開かす瑞の大神

日の本の昔の御代の国風くにぶりに今立直す歌祭かな

開祖さまのお歌

ともしびの消ゆる世の中今なるぞさしそえいたす種ぞ恋しき

^{ひぐらし}日暮の鳴く声きけば月の夜に^よ成るは^な淋しき^{さび}日の出を待つぞよ

本の種吟味いたすは大本で種がよければ末代の種

月の夜に嵐の音のさびしさよ千鳥鳴く声日の出を待つぞよ

朝雨の心勇まし春の花この行く先は広き世になる

聖師さまのお歌

いとけなき頃は雲間に天守閣白壁映えしをなつかしみけり

旧城趾落ちたる瓦の片きれあつめ城のかたちをつくりて遊あそびぬ

寝ながらに月を仰ぎしあばら家の昔の住居わが眼に新らし

ふるさとの山野は秋の錦きて吾を照らせど父母は世になし

足乳根の母も吾身も応挙も生まれし清処すがどと思へばなつかし

ほのぼのと訳は知らねど大いなる望のぞみに生きしわかき日のわれ

百八十国ももやそくにくまなく大道おおじを照らさむと若き日吾は故郷を離りぬ

慈眼もて世をなげきましし御開祖の御面みおもて今も吾が目に輝ふ

背を出せば教御祖おしえみおやは子のごとく喜びてわれに負はれ給へり

鶴山に妻は錦の機はたを織り吾亀岡に萬代よろずよを教ふ

よしや身は蒙古のあら野に朽つるとも日本男やまとの子の品は落さじ

芦別あしわけの山はかなしも勇ましも神代ながらの装ひにして（北海道）

北海の旅路はろけし吾は今出羽の大野おおぬの雨きききてをり（東北）

鳥が啼く吾妻あづまの国に御代をおもふ宿の枕に雨の音さびし（東京）

日野川の水源みなもととほしも大山だいせんの尾根に湧き立つ雲につづけり（鳥取）

出雲路の旅にし立てば時じくも吾が眼引かるる雪の大山（島根）

八雲立ついずもの宮の清庭すがにわにもゆるがごとくつつじ花咲く（島根）

言靈の誠を筑紫のしまが根に生かし照さむ惟神吾は（九州）

雨はれの今日の真昼まひるのあたたかさ旅のやどりに妻としるるも

待ちわびし月は山の端は昇りけり三千年みちとせながき夜を照らして

春風の薫りかをて諸の花開く長閑のどかな御代となさしめ玉たまへ

鶴山に機はたや織るらむ吾妹子わぎもこは青葉の風を窓に入れつつ

よろずよの常世とこよの暗もあけはなれみろく三さんえ会の暁きよし

この神書もしなかりせば地の上に弥みろく勒の神世は開けざらまし

生き生きて生きの限りを天地の道にいそしめ神の御子たち

二代さまのお歌

きをつよくひろく大きくこまやかにあたたかみのある人になりたき

人はみな土よりいでて土に生き土の恩うけ土にかくるる

戦争に入れる力を平和なる道につくせばこの世天国

めいぢなる二十五年のはつ春に神のうぶ声いまもわすれじ

国々にきたる大難小難にのがせ給へと祈るご開祖

日の御恩月のお恵み土の恩はなれて人の住むところなし

かむながらみたま磨くといふことは土地つちのころになるをいふなり

ひのもとのくににうまれし神の子よよき種をまけ野にも山にも

三代さまのお歌

地の上になげきは影もあらずなと力なき吾はただ祈るなり

示されし道はひろらに明らけしなに今更に迷ふ人らぞ

雨嵐吹きすさぶとも吾は行かむ一つともしび高くかかげて

吾がいのち天^{かみ}知り給ふ残されし道ひとすじにふみゆかむのみ

貧富の差ちぢまりて地の上にあらずひのなき世ときけばひたに恋しき

世の人の幸を吾のこひ願ひ西王母を舞ふ還暦の日に

ほがらかにあかるき鳥の声きけばみろくの春のおもはるるかな

巖として微動だになかりき祖母の一生の信念われにあらしめ

極貧にやすんじたりし祖母の一生おもへば惑ふ事なし

神仙の世界に君はるましつつ吾がゆく道を照したまへる

天にます母にまみえむ日のためにうつし世のわざはげみて生きむ

旅の用意しつつし思ふ楽しみて行きたることの無かりし母を

己おのが道を一すぢに極きわめまどひなき人等のなかに今日吾はをり

よき友を得しよろこびにきほひつつ今日の一日茶を学びる

家に待つものひとりなくさすらひに似し思ひして湯の宿にをり

吾にのみ人等の多く求めくるうつたふる人のあらざる吾に

吾が心知ることなくて終へまさむそれにてよしと或る時おもふ

とがりるし心の今日は安らぎて芽吹きはじめし山にむか対へり

怠りて吾がゐる日々にわが庭の馬あし酔木は白き蕾むもちたり

雪雲が東の方に流れ行く夕べひと時心恋しもこほ

潮騒しほさいを恋ひて来にけるこの海に音のひそけく波の寄りゐる

人の前に堪へるし涙はばかりず君を嘆きぬひとりの部屋に

石荒き坂路となれば先をゆく友は待ちゐてわが手を取りぬ

あと幾日保つならむか今日も来て紅葉の照れる道に立ちたり

降る雪は早くなりつつ石荒き谷の流れに音立てて落つ

萩の枝折れしもありて野分のわきすぎし庭にくれなるの花こぼれるる

かかる世の来るを憂ひて叫びたる吾らの友は囚はれにけり

いささかも所信をのべてひるまざる母の清しさは吾をなかしむ

黒雲くろくもにたちおほはれてかくるともわが行く道を迷はじと思ふ

とらはれのみとなりませどあめつちにはじめぬは君がまことなりけり

むねはしらとりちらされてよこたはるみや木をみては我はなみだす

去年こぞの秋とりこはされし宮跡のひはだの中に梅の花さく

朝の散歩につみて帰りし草の名を野びるの花とききてしたしき

夜毎よごと虫なきて秋もとのへり長き旅より夫かへりこし

玉とこそわがいつくしめる夫つまの名をこの警官ら呼びすてにいふ

夜ふけて雨ふりいでぬ留置場に夫もめさめて聴きゐるならむ

井戸端の水をのみつつ母に夫にのませてやりたく涙こぼしつ

たはやすく泣けぬわれかも帰り来て一人となれば涙にじみ来

君なくて一日をだにも生きがたきおのれの心いまぞしりたり

萩に置く白露のごと吾が祖母の声は透きとほりふるひを帯びるき

吾が祖母の予言たがはぬ世の相を思へばさま五六七みろくの世は近からむ

道のべに桜うつくしく散りしけり吾が母上は死にたまひけり

この道を継ぐべく生れ来し吾に神の守りのなかるべしやは

教団に不平もつ人去りたまへ清きが残り道を護らむ

霧に似し雨降る中に雲珠うづぎくらたま桜珠の如くに咲きみちにけり

円まるく明るき月むかに對ひて星一つ輝く暁を礼拜に出づ

猩々のよそほひ成りて立つ鏡の間わが初舞台の幕上らむとする

茨の路ひらきし友ら皆天にあり吾一人けふのよき日にあへる

吹きつくる風のはげしきわがつまをあわれみたまへおからすの神

尊師さまのお歌

人心まず清らかにならざれば何すれぞ世が平和になろう

他人^{ひと}にゆるく吾にきびしくあるなればこの世の中は平和なるべし

助けもし助けられもしお互に仲良く栄えてゆくぞ楽しき

いと弱く小さき吾と知ることが道を求むるはじめなりけり

省みることのすくなき人にこそ悪魔は宿るものによりけれ

得^え堪^たへじと思ひしこともいくたびぞされども遂にわが堪へて来し

千万の黄金にまして魂の一つを得るぞ嬉しかりける

よきことを思ふだけでもよき種をこころの国に蒔きてあるなり

何をかもわれは願はむひたすらにもとつみたまと清めたまはれ

いきどほり呪ひ恨みのかずかずを覚えてのちぞ悟らえにけり

得も言はず苦しき時はひたすらにみづのみたまとわれはとなへつ

休むのは働くためぞなべて世の否定はよりよき肯定のため

物ごとに差別^{けじめ}あればこそ天地^{あめつち}はいやとこしへに保たれてゆく

われとわがくせ直さむとひたぶるにとこ省みる人ぞゆかしき

事にあたりて省みざれば悟りなし悟りなければ魂たまは進まず

よみがへるたび毎みたま清まりていやつぎつぎに神に近づく

昔あり今あり後のちもある身ぞと知ればうれしきとはの天地あめつち

他人ひとのこといふ暇があれば吾とわれを胸に手をあて考へてみよ

それぞれに真似のできない長所ありいかなる人も侮るなゆめ

目をあけて見れば天地てんちはかぎりなしより良き方へひた進むべし

吾とわが主義イズムのひとやに囚はれてせまく小さく暮らすあはれさ

吾なりしならば如何にと他人ひとのこと思ひやるこそ神心なれ

えらいとも偉くないとも思はずに力のかぎり尽くせもろ人

いづこより漂ひ来る嬉しさぞ月照る夜半よわの梅の香かのごと

かぎりなき天津みそのを開くべしさがのまにまに伸びよ人草

一二三四五六七八九十と弥栄へゆく大本の道

ある如くあらしめ給へなる如くならしめ給へと今日も祈りつ

言はざれど径こみちをなして集ふてふ桃の花こそげに慕はしき

惟神たまちはへませ大本の不動の信にわれふるひたつ

一点の曇りなきまで磨きなばみなそれぞれに光る玉なり

すめ神と心のかぎり念じつつなすことごとは実を結ぶなり

おのが身をいたはる如く他人ひとの身をいたはる心に神やどるなり

人知れず尽すまことはそのうちに天知る地知る人が知るなり

腹立てな短気は損気と昔からちゃんと相場がきまりおるなり

善よき友と交はる時はおのづからわが魂たましひもみがけゆくなり

吾とわが心みつめてよしあしをよく考へよ事をなすとき

世の中に嬉しきものは情なさけなり理に落ちすぎてはさびしかりけり

ひたすらに祈りに祈りひたすらに歩あゆみに歩まばいつかいたらむ

はるかぜの吹きのはげしき宇津うつつそみを見そなわすらむおからすの神

四代さまのお歌

水晶の種と生あれ給ふ三代の教主きみの御跡をかしこみ継がなむ

祈りつつ只ただいのりつつ吾が行かむゆくてに雨風吹き荒すさぶとも

代々だいたいの教御祖おしえみおやの御跡おんあとを踏みて行かなむ今日けふよりの吾

安らぎて気高き母の終つひの顔その父母ちちははの顔に劣らず

通夜の客に会釈かへしつ吾が足らふこの美しき母のかんばせ

今宵ばかりは数多あまたきませよ通夜の客気高き母のかんばせ見ませ

何思ひ父の靈前みまへに坐るらむ気触れし者よと嘲笑わらひし人が

うからとの歡少ゑらぎすくなき父上の一生ひとよを想ふ写し絵ゑみつつ

終つひの日も好みし風呂に入りて逝ゆきし父を思へば心和める

亡き父の体に合せし風呂桶か ややに短き湯舟に吾が入る

父上もかく入り給ひしかと思ひつつ父の湯舟に足をかがむる

父上の部屋を開くれば煎じ薬の匂ひこもれり在りし日のごと

ミロクの世願ひし聖師きみのよそほひか能西王母せいおうぼの古き写絵うつしゑ

信徒まめひとの念おもひの凝りこし長生殿けふ今日はれやかに舞台ひらかる

ミロクの世の型てふ能西王母かしこみ舞はなむ今日の佳よき日に

エスペラント記念祭典始まりていつしか空晴る聖き師よ嘉みせるか

さまざまの祈りの姿言葉なれど平和を願ふ心は一つ

冷夏なる去こ年ぞは陽ひを恋こひん干かん天てんの今年こ年は水みの恵けみを願ねがふも

異常気象となりて久しも天あめ地つちのみ恵みを忘れし人らのおごりに

信徒まめひとの心こもれる歌垣うたがきにさはなる曲うたをはらはせ給へ

降る雨にぬれそぼちつつ御開祖ごかいその御辛苦ごしんくしのぶ沓島めしまの山に

これ以上曲まが事増ことますな残る月日つきひ聖師きみに祈らむ十二夜の月

夜半よはさめて静かなる雨聞きをればいつしか心穩おだひになれる

言いひたき事少ことすこし控ひかゆること覚おぼゆ教主けうしゆしうにん就任ななとせも七年となり

冷^{つめ}たき風^{かぜ}浴^あびし思ひすテレビニュースむごきあやめは少年^{せうねん}と知^しり

み祭りに吾が仕へる拜殿へ梅雨明けの今日風通りゆく

宗教はアヘンと言はれてせんもなし異宗者どうしの争ひ絶えず

脳死臓器移植法の改悪を近く控へてまだ抗^{あらが}ふかとふ機関長らあり

国歌国旗脳死を人の死と決むる今の日^ひの本^{もと}いと情けなや

教主さまのお歌

践^ふみ行^ゆかむ道^{みち}は遥^{はろ}けく険^{けん}しくも代^よ々^よの教^み御^お祖^やよ守^{まも}らせ給^{たま}へ

あらしひのなき世界^よをひたに祈^{いの}りつつ吾^{われ}大本^{ほん}の道^{みち}統^ちを継^{つぎ}がなむ

弥^や仙^{せん}山^{さん}に咲^さく山^{さん}芍^{しやく}薬^{やく}の花^{はな}のごと清^{きよ}くやさしく強^{つよ}くありたし

この地球^{ほし}のこの世^よ紀^きにめぐり生^うまれきて神^{かみ}業^{わざ}つかふる幸^{さい}思^しひをり

信徒まめひとと心ひとつに進みたし五六七の御代の道険しくも

日本魂の御種となりて践ふみ行ゆかむうそ多き世界よの誠尊し

聖師き様みの言こと霊たま世界せかいへ響あく愛善あいぜん歌声かたからかにいさみ進まむ

愛善の農に仕ふる人々はみづほの国の宝なりけり

末代まつだいに例ためしもあらぬ岩戸開きき聖師き様みに捧たげむつたなき日々を

稲そよぐ神饌田の畦あぜに立ち緑とぼ乏しき国々を思ふ

聖師き様が夢み八十年やそとせめぐり吾は今大モンゴルの草原に立つ

草香るモンゴルの平原のに朋ともら集ひ薄茶捧ぐる馬上の聖師き様に

滔々たうたうと計らひこえてみ経綸しぐみの進み展ひらくを目の当たり見る

火のご用百年めぐるみまつりに共に祈らむひとつ世界に

みちのくの国に神々集ひ来てみそなはしませみ歌祭りを

三女神いつきまつれる善知鳥の宮に八雲の音色澄みわたるなり

素の山に瑞のみ光あまねきて御世祈る歌十重に二十重に

歌垣の型なすみ跡にもろ人の浄き言靈四方に響かむ

貴人台にしるし給ひし三代教主様がみ歌五十年めぐり今ぞ歌碑建つ

皆神山かみやまの木の花桜永遠とほに栄え安けきみ世を守らせ給へ

七つ海の泥を洗ひて三みつの御玉みたま金竜海よりあらは顕れ出づる

神聖苑素すの大神の御前に越の国人大和合なる

浪高き金竜海に玉水たますいを注ぎつつ祈りぬ開祖みおや様や偲びて

わが願ひエスペラントの歌まつり人類はらから同胞からこぞりてエルサレムの野に

神代より日本魂やまとこころを受け継ぎし歌人集ひて平安世やすき祈らむ

国々のもつれし糸をほどきつつ平和織りなすみうたまつりは

